

皆さんへ

名久井 芳枝

岩手大学人文社会科学部の学芸員養成講座「博物館実習」において「実測図作製実習」を取り入れたのは、1988年のことであった。残念ながら初年度の実測図は各自持ち帰る形をとったため、受講学生の人数と共に詳細が不明である。翌年からは記録保存できる実測図の価値を活かすために、「実測図集」という形で後世への情報伝達を目指す事にした。

B4版の「実測図集」は第1集から第22集まで、その後はA4版の「博物館実習一年のあゆみ」の中に23集から本年度発行の26集までを収録している。初年度的人数は不明だが、「実測図集」の第1集から第26集までに収録された実測図は1050点余、学生の参加数はおおよそ990人余という結果である。初年度を入れると1000人以上の学生が実測図を作製したことになり、驚きを感じる。

「実測図集」の内訳は次の通りである。第1集～第3集は九戸郡山形村の「長内三蔵コレクション」。第4集～第5集は久慈市山根町端神「岩泉家資料」。第6集～第10集は九戸郡山形村小国「内間木家資料」。第11集～第12集は九戸郡山形村日野沢「野場家資料」・「三上家資料」。第13集は青森県三戸郡三戸町蛇沼「山瀬家資料」。第14集～第18集は岩手郡滝沢村滝沢字土沢「駿河家資料」。第19集～第22集は西和賀郡西和賀町細内「小田島家資料」。第23集～第26集は岩手郡滝沢村教育委員会所蔵有形民俗資料である。

これらの仕事は、幸い聡明なジャーナリストの目にとまり、朝日新聞の「天声人語」に取り上げられた(18頁参照)。1990年1月15日は、ずばり「実測図集」で。1994年9月15日には『岩泉市太郎翁の技術』が取り上げられた。更に実測図とは関係ないが、名久井文明講師が岩手県立博物館で手がけた「北国の樹皮文化展」を、天声人語子が直々に見学され、1991年10月27日の「天声人語」に取り上げている。「北国の樹皮文化展」の素案は、皆さんが取り組んだ「企画展の立案」の際に活用したものである。「ごみ、がらくた」と言われ続けた文化財の価値に気づいてしまった人間が、その価値の掘り起こしに尽力するのは当たり前のことではあるが、周囲の理解の無さにへこたれる事もしばしばあった。そうした状況の中で、ジャーナリストの冷静な視線に私達は大きく励まされた。合計3回取り上げられたことになるが、その出来事は、当時の私たちに、まだ日本も捨てたものではないかもしれない…と、かすかな希望を感じさせてくれた。

本来文化財の保護保存は、その分野に関係なく文化財行政の役割であると認識している。しかし現状は埋蔵文化財以外は心許ない状態におかれている。有形民俗文化財は「国民の生活の推移を理解するため欠かせないもの」として、文化財保護法の中で規定されているにもかかわらず、多くの自治体で厄介者扱いされている。しかしそれらは、文化財保護法により保護の対象となる文化財である。行政の中に保管されていれば、よもや捨てられる事はないだろうとの考えから、私達の調査は「もの」を作り使った事のある人が「もの」と共に存在しており、なおかつ行政の手が行き届いていない資料を救う事を急務として取り組んできた。幸い「もの」の情報を保有しておられる方と出会うことができ、北上山地の生活に関わる聞き取り調査はかろうじて間に合った。しかし平成20年頃になると、実際に「もの」と生活を共にされた方々は彼岸に旅立たれ、「もの」に関わる生の情報を採集することが困難になり、実習の方向を変えざるを得なくなっていった。それまでの20年



「実測図集」第1号～第22集



「実測図集」第23号～第25号収録の  
「博物館実習 一年のあゆみ」

間は、御高齢者の命と競走するような日々が続き、他を省みる余裕は全くなかった。いずれ30年以上前に「大事な世界が打ち捨てられている…縄文時代から続く智恵や技術を受け継いだ生き証人がまだ御存命のうちに、できる限りの情報を記録しておかなければ、貴重な情報が永遠に消え去ってしまうのは自明の事実だ」と気づいて走りはじめた。その道程は遠く、そして厳しいものがあつた。しかし30年余の歳月を経た現在、その折々の道に顔をのぞかせる思い出は、ずっしりと重みがあり、私の人生を豊かにしてくれた。「気づいてしまった者の責任」を一応果たし終えたのではないかと、今は思うことができるようになった。

研究者が得た成果は社会へ還元しなければならない。私達は記録したものをどう確実に未来へ伝えればいいのかという課題を抱えた。そこで選択した方法は情報を書籍に換えて国会図書館に納めるというものである。2冊の本を納めるのが義務であれば、少なくとも国会図書館の倉庫の中で情報が保管され、未来へと伝達される筈である。また全国にちらばつた書籍がどこかであらうじて生き続けてくれれば、一箇所に限定して保管するよりも安全だと考えた。その結果として「長内三蔵コレクション」は『若者たちと民具』に、「岩泉家資料」は『九十歳岩泉市太郎の技術』に、「内間木家資料」は『山と生きる』に、「駿河家資料」は『ものから見た駿河家の暮らし』(滝沢村調査報告書第三十五集)として実を結んだ。立場上、研究費がどこからか出るという状態には無いため、『ものから見た駿河家の暮らし』以外の本は私費で発行してきたが、購入していただくという形で多くの理解者に支えられた。

文化財の記録は「過去から未来への掛け橋」となるものだと考えている。「塵も積もれば山となる」という言い方があるが、この仕事は、脇目も振らず愚直にこつこつとやることの意味を私に教えてくれたように思う。働いては本に費やすという日々ではあつたが、山の中で哲学者のように生きておられた大先輩たちとの出会い、そして、きらきらと真摯に「もの」と取り組んでくれた千人余の学生たちとの出会いは、この仕事を継続する原動力となりうるものであつた。今しみじみとした喜びを感じている。

「実測図集」は本号をもって終了します。全てには始まりがあり、終わりがありますが、清々しい気持ちでこの時を迎える事ができることを感謝します。皆さんのこれからの人生が幸い多きものであるようにと願ってやみません。どうか理念のある生き方をして下さい。

それでは皆さん お元気で！

(2013年10月31日)



『九十歳岩泉市太郎の技術』



『若者たちと民具』



『山と生きる』



『ものから見た駿河家の暮らし』  
(滝沢村調査報告書第三十五集)

1970. 1. 15  
天声人語

【天声人語】  
鮮やかな紅葉に開かれた岩手県立博物館で、珍しいものを見つけた。来月下旬まで続く「北国の樹皮文化」展。縄文の昔から山の木々とともに生きてきた先人が、樹皮をどう利用したかがよくわかる。何と多くの用途があったのか。樹皮は、鞆ひくはけは利用して、鞍物をつくるとる道具や、皿、筒などを作る。鞆を細くすれば繻ひの好都合だ。様々な入れ物ができる。運搬用の器、山仕事の道具入れ、腰につるす入れ物……「シナノキ、ブドウなどの樹皮で鞆に入れた物は、さしすめバッグ類の先祖だろう。いわゆる人間工学的配慮が行き届き、形、大きさ、色、裏面がすばらしい。手の指や背中の汗がしみ込んだのか、鈍い輝きが、人間の生活を感じさせる。もつと細くすれば縄になる。糸になる。織った布もある。調理に野鹿に牛馬を照明に、樹皮が生活を支えていたことが目に見える。「貴重な伝統的技術を後世に伝えた」と考えて」と金野博一郎氏は言う。今でも、鞆を織じたり鞆に編み込んだりするのには細いサクラの樹皮を使う。蛇の柄に巻かれたサクラの樹皮に、つなぎ目がない。驚いた。考古学者の名久井芳枝さんが判明かしてしてくれた。木を細くたたき、中の木質部を抜いて薄た樹皮なのだ。樹皮で作った小さな筒に工品の線を入れ、火のついた炭を一つ入れて煙にさせる。農作業の時に蚊や虫を遠ざける工夫で、だんごの厚ぶそらだ。道具一つが、昔の情懷への、いろいろな想像をかき立てる。▼「石器が金属器に変わる大変化があったのに、縄文以来、樹皮製の器物は、石油化学製品が普及するまで、ずっと使われてきた」と名久井さん。それが、いま急速に消えつつある。技術を伝承する人も減った▼興外の北海道、シベリア、サハリン、米國、カナダその他の樹皮製品もあつて興味をそそる。

天声人語

27  
鮮やかな紅葉に開かれた岩手県立博物館で、珍しいものを見つけた。来月下旬まで続く「北国の樹皮文化」展。縄文の昔から山の木々とともに生きてきた先人が、樹皮をどう利用したかがよくわかる。何と多くの用途があったのか。樹皮は、鞆ひくはけは利用して、鞍物をつくるとる道具や、皿、筒などを作る。鞆を細くすれば繻ひの好都合だ。様々な入れ物ができる。運搬用の器、山仕事の道具入れ、腰につるす入れ物……「シナノキ、ブドウなどの樹皮で鞆に入れた物は、さしすめバッグ類の先祖だろう。いわゆる人間工学的配慮が行き届き、形、大きさ、色、裏面がすばらしい。手の指や背中の汗がしみ込んだのか、鈍い輝きが、人間の生活を感じさせる。もつと細くすれば縄になる。糸になる。織った布もある。調理に野鹿に牛馬を照明に、樹皮が生活を支えていたことが目に見える。「貴重な伝統的技術を後世に伝えた」と考えて」と金野博一郎氏は言う。今でも、鞆を織じたり鞆に編み込んだりするのには細いサクラの樹皮を使う。蛇の柄に巻かれたサクラの樹皮に、つなぎ目がない。驚いた。考古学者の名久井芳枝さんが判明かしてしてくれた。木を細くたたき、中の木質部を抜いて薄た樹皮なのだ。樹皮で作った小さな筒に工品の線を入れ、火のついた炭を一つ入れて煙にさせる。農作業の時に蚊や虫を遠ざける工夫で、だんごの厚ぶそらだ。道具一つが、昔の情懷への、いろいろな想像をかき立てる。▼「石器が金属器に変わる大変化があったのに、縄文以来、樹皮製の器物は、石油化学製品が普及するまで、ずっと使われてきた」と名久井さん。それが、いま急速に消えつつある。技術を伝承する人も減った▼興外の北海道、シベリア、サハリン、米國、カナダその他の樹皮製品もあつて興味をそそる。

天声人語

46  
岩手市太郎さん、山形村で生まれた。日露戦争が99年始まった。一九〇四年である。小学校へは、ももひきをき、鞍物をつくりきり込んで背負い、ヒエとカキの二重を麻布の袋に入れ、みそ汁を持って通った。それから人生はほとんど北郡北上山の中だけ暮らした。柿、木挽き、炭焼き、牛糞、雑穀栽培、養蚕……と、いろいろな仕事をした。先人から学びながら、岩手さんの一家が村人たちと送ってきた生活の糧は興味深い。▼何でも道具、自給、自足自活はなればならぬ。今のうちに便利な時代ではなかった。その生活のあり様が、名久井文明書「九十歳岩手市太郎の技術」という本に細かく再現されている。岩手さん本人が記していた「木地、柿、一八七〇年」なる参考考にして、詳しく話を聞いたものだ。▼クリ、コナラ、ミズナラ、カシワ、トナリと種々な樹種の樹皮を、以前は日常的に食っていた。ナラの葉をシタミといひ、大衆の餅子がシタミ拾いをする。ひと秋のうちに「石の三つ」拾い集め、翌年の秋まで食べた。あゝ孩童を含め、その処理の方法が知られている。▼餅子食が縄文時代の伝統を受けつづけるので、乾燥させて穀をとる方法も同じだ。という事実を考古学者の名久井さんは指摘している。やはり縄文人の技術を受けついでた、とみられる樹皮加工の実例も面白い。▼岩手さんが樹皮や種物繊維を利用してつづけている、麗やわらじなどが精密な実例図、写真で示されている。岩手大学の学生が名久井芳枝さんの指導で実験したものだ。昔話だけではない。残っている様々な道具の類が、過去をなまなましく物語る。▼昭和初年に「四十年の枕木をとった」仕事が出来た。それだ。一世紀近くを生きた人の物語は、歴史である。よい聞き出し役がいれば、古きは縄文時代と現代とを結びつける語り部がすむ。